モノに関する所有経験の想起が愛着意識に及ぼす影響

○羽鳥剛史¹・三木谷智²(非会員)・福田大輔¹(非会員)・藤井聡³
 (¹東京工業大学理工学研究科・²千葉県県土整備部・³京都大学工学研究科)
 キーワード: モノ愛着、所有経験、拡張自己

The Effect of Retrieving Memories of Possessions on Attachments to Objects
 Tsuyoshi HATORI¹, Satoshi MIKIYA², Daisuke FUKUDA¹, and Satoshi FUJII³
 (¹Graduate School of Science and Engineering, TIT, ²Chiba Pref., ³Graduate School of Engineering, Kyoto Univ.)
 Key words: Attachment to objects, Memories of possessions, Extended self

目 的

社会心理学や発達心理学の分野を中心に、人間の愛着意識(attachment)に関する様々な研究がなされている。一方、モノに対する愛着を対象とした研究は数少ないが、その中で Belk (1988) は、「拡張自己(extended self)」という概念を提唱し、「自己」という感覚は、自分自身の身体だけでなく、他者や物的所有物、物的環境にまで及び得ることを指摘している。ここで、「拡張自己」とは、「自己の一部であると認知、同定している全てのものの集合体」と定義される(藤原・池内, 1996)。そうした自己概念については、古くは James (1892) も「人の客我(一般に“me”と訳される。原文では単に“man’s Self”)とは、考え得る最広義においては、人が我がものと呼び得るすべてのものの総和である」と述べている。

以上の議論によれば、モノに対する愛着は、そうした「拡張自己」の観点から捉える事が出来るものと考えられる。すなわち、モノに対する愛着は、そのモノへの自己意識の拡張(self extension)を通じて高まるものと考えられる。実際、池内ら(2000)は、物的所有物を自己と見なす傾向とその所有物に対する情緒的結びつきの強さとが密接に関連していることを指摘している。さらに、Belk (1988) は、拡張自己に含まれるモノは、自己の過去の経験や記憶を呼び起こす効果を持つと述べている。そして、そうしたモノに付随する自己の経験や記憶が増えるほど、そのモノに対する愛着がより醸成されることを示唆している。

この様にモノに対する愛着は、そのモノに付随する記憶や経験の蓄積に応じて高まり得る可能性が考えられる。そのため、モノに関わる記憶や経験を想起することによって、そのモノに対する愛着が活性化される可能性が考えられる。本研究では、この点に着目し、モノに対する愛着意識とそのモノに付随する過去の経験や記憶の想起との関連性について、以下の仮説を掲げ、それを検証することを目的とした。

仮説 モノに関する記憶の想起によってそのモノに対する愛着意識が活性化される。

なお、上述した様に、既往研究においても、モノに関する記憶や経験と愛着意識との関連について示唆されているものの、そうした関連性についての実証的な検討は十分にはなされていない。本研究は、以上の仮説検証を通じて、そうした関連性の経験的な妥当性について検討するものである。

方 法

本研究では、以上の仮説を検証するにあたり、具体的なモノとして「自転車」を取り上げ、アンケートを用いた実験調査を通じて、自転車についての記憶の想起が自転車に対する愛着意識に及ぼす影響について検討することとした。

実験対象 大田区内の在住者の中から住民基本台帳に基づき 3000 名を無作為抽出し、郵送で調査票を配布した。その結果、合計 1046 名から回答を得た(有効回答率 34.9%)。本研究で

は自転車利用者のみを対象としたため、回答者の内 704 名を分析対象とした(男 284 名、女 416 名、年齢構成 10 代 3.1%、20 代 7.5%、30 代 17.9%、40 代 18.9%、50 代 17.3%、60 代 21.2%、70 代以上 13.9%)。

実験手順 (1)自転車に関する記憶を想起させる操作と設問を設けた調査票(「実験群」315 名)と、(2)記憶を想起する設問を設けなかった調査票(「統制群」389 名)の 2 種類を作成し、それぞれの調査票を無作為に実験対象者に配布した。

実験条件 実験群には、まず「これから、あなたが持っている自転車について考えていただき、その上で質問に答えていただきます。現在、あなたが乗っている自転車のことを 10 秒程度、思い浮かべてください。」と指示し、自分の持っている自転車についての記憶を想起してもらうように要請した。そして、調査票の次頁にて、自分の自転車に関する記憶をさらに想起してもらうために、自分の自転車の色や、ベルやライト、カゴ、荷台の有無について回答するよう要請した。次に、自転車に関する一番古い記憶と、自転車を利用した際の楽しかった記憶について、自由記述にて回答を要請した。一方、統制群には、以上の実験操作と設問は設けなかった。

愛着意識項目 実験群と統制群ともに(実験群は上記の実験操作の後に)、「今の自転車を大切にしたいと思う(a)」「今の自転車をずっと使っていきたいと思う(b)」「今の自転車をスクラップにするのは悲しい(c)」「今の自転車には、愛着がある(d)」「今の自転車が好きだ(e)」「今の自転車が気に入っている(f)」「今の自転車に乗るとリラックスできる(g)」という設問を設けて、それぞれ「全然、そう思わない」から「とても、そう思う」までの 5 段階で回答を要請した。因子分析と信頼性分析の結果、上記の質問項目の内、(d)、(e)、(f)の 3 つの項目の加算平均から「自転車愛着尺度」を構成した($\alpha = .96$)。

結 果

実験群と統制群の間で自転車愛着尺度の平均値を比較したところ、実験群で 4.204、統制群で 4.029 となり、実験群の方が 0.175 ポイント高い結果となった。そして、この差異について t 検定を行った結果、5%水準で有意となった。この結果より、自転車に関する記憶の想起によって自転車への愛着が活性化される可能性が示された。この結果は本研究の仮説を支持するものである。

引用文献

- James, W. (1892). *The Principles of Psychology*, Vol.1, New York: Henry Holt.
 Belk, R.W. (1988). Possessions and the extended self. *The Journal of Consumer Research*, Vol.15 (2), pp.139-168.
 藤原武弘、池内裕美 (1996)。「自己」「拡張自己」「身体統制に対する態度」の相互関係に関する社会心理学的研究、消費行動研究, Vol.4, pp.99-114.
 池内裕美・藤原武弘・土肥伊都子 (2000)。拡張自己の非自発的喪失：大地震による大切な所有物の喪失調査結果より、社会心理学研究, Vol.16 (1), pp.27-38.